

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

アシシ。の掌編劇場③

書店での出会いと別れ

作・芦川淳一

仕事仲間たちと飲んで、最終電車で帰ってきた私は、駅前にある終夜営業の書店に入った。

古井由吉の『杏子・妻隠』があったら買おうと思ったのだ。ずいぶん以前に買ってはいたが、未読のまま、つい最近とつぜん読みたくなった。ところが、どこにいつてしまったのか、なかなか見つからない。

そこで書店にあつたら買い、なかったら、もう少し自分の本棚のなかを探してみようと思った。

文庫の棚に近づいたとき、同じ棚の列を見ている女性に目がひきつけられた。

姿勢はよく、髪はセミロングで、ウエストのあたりを絞ったベージュのコートを着ている。コートの端からは白いフレアスカートの裾が見えていた。

私はファッションに疎いほうだが、その女性

の装いに、とてもエレガントさを感じた。姿勢のよさのせいもあつたろう。

西尾維新の小説のヒロイン・掟上今日子を彷彿とさせた。

ただ、女性は棚を見ているので、私はその横顔しか見ることができない。

ちらちらと女性の姿を見つつ、私は『杏子・妻隠』を探したが、棚にはなかった。

本来の目的は終えたのだから帰途につくべきなのだが、女性のことが気になってしかたない。私は、その女性に声をかけようなどとは思わなかった。歩いて七分の近場に住居があるし、妻も子供もいる。しかも、私は充分に老年の域に達している。

ナンパなど、もつてのほかである。

ただただ、その女性を見ていたかった。

かなうなら、顔も見たいが、無理に見て気味

悪がられるのは本意ではない。

棚を見て、本を抜き取ってはぺらぺらとめくり、内容を吟味する……というふりをしながら、ちらちらと女性を見る。

彼女は、目当ての本を探しているのではなく、なにか興味をそそられる本を探しているようだ。本を手にとって中身を見ている姿が、なんとも知的に見えてくる。

本屋で本を探している女性がすべて知的とは限らないが、彼女には知的なオーラを感じたのである。

すると彼女は、その場を離れた。手に本は持っていない。

ほかの列に移動したのだが、私はついていかない。あまりにあからさまだからだ。

一計を案じ、出入口近くの雑誌コーナーへ移る。雑誌を立ち見しながら、彼女が出入口に、

あるいはその近くのレジに来ないかと期待して待った。

だが、なかなか彼女はやってこない。

雑誌に飽きた私は、単行本のコーナーへ移動した。なんとなく、彼女がいそうな気がしたが、予感どおり彼女はいた。またも横顔とセクスある姿をちらちらと見る。

彼女を見るあいまに単行本の棚を見た。

何冊か抜き取って、読むふりをしながら、彼女をちらちら見ていたが、彼女はまたそこを離れていつてしまった。

さてどうしようと思ったときに、一冊の本の背表紙が目飛びこんできた。

『万年筆インク紙』というハードカバーの本で、作者は片岡義男だ。

現代小説で、村上春樹以前に、日本で初めて



翻訳調の文体を確立した作家である。

手にとつてページをめくつてみると、片岡義男がこれまで使つてきた万年筆の思い出や、万年筆で文字を書くことの意味や楽しさなどがつづられているようだった。

万年筆好きな私は、この本が欲しくなった。千八百円と少々高いが、これは買わねば後悔すると、レジに向かおうとした。そのとき、彼女の姿が目の前を横切つた。文庫の棚から歩いてきたようだ。文庫から単行本の棚へ移り、また文庫の棚へいったということは、ある程度買いたい本に目星をつけて、迷つた挙句、いま決心したということだろう。

私は、ゆつくり歩き、支払いをする彼女のうしろに立つた。

彼女は本を受けとるとレジを離れた。彼女がなにを買つたのか見ることは出来なかつた。

私は支払いを終え、買ったばかりの本を抱えて書店を出た。

まわりを見ると、彼女のうしろ姿が目に入った。彼女は、わたしの住居とは逆の方向に歩いていく。

私は、踵をめぐらせ、家路に着いた。彼女にたいして、感謝の気持ちを抱きながら。

彼女の魅力に浸つていたくて書店に長居をしたのだが、単行本の棚を見ていなかったら、片岡義男の『万年筆インク紙』を手に入れることはなかつたかもしれない。そもそも、四か月前に出版されたこの本の広告や書評を見たことがなかつたので、存在を知らないままに終わった可能性さえある。このところ、ネットでの購入ばかりで、書店で本を物色することが極端に少なくなつていたからだ。

だから『万年筆とインク紙』を手に入れられ



たのは、彼女のおかげなのである。

こんな文章を書いてみたくなったのは、見し
らぬ魅力的な彼女との、一方的な短い出会いと
別れを、小説風ともエッセイ風ともとれるよう
な筆致で書くことが、片岡義男的ではないかと
思ったからだ。

片岡義男的というのは勘違いかもしれない。

勘違いではなくとも、私の力量では、片岡義男
風に書けるわけもない。でも、どうしても書き
たかったのだ。

(了)